

三種九部の法華經 —末法流布の妙法蓮華經—

三種九部の法華經とは、文義意・種熟脱・広略要の三種類、九つの内容に法華經を判別されたものを言います。

日蓮大聖人は、この三種九部の判別の上から、末法流布の法華經は意・種・要の法華經であるとされて、法華經の真意を説き明かされています。

文義意の法華經

文義意の語は、一般に広く用いられていますが、文とは文面、義とはその文の意味、意とは文義によって顕わされる主旨のことです。

文義意の法華經について言えば、文とは一部八卷の法華經の文字、義とは迹門と本門の教理、意とは妙法蓮華經の五字のことです。

通常は文に従って、その意味を理解し、その上で文の主旨（意）を弁えることになりませんが、仏法における文義意の法華經に関しては、通常の場合とは全く逆の順序を踏まなければなりません。

これは、法華經の心は凡夫のうかがい知ることのできない、唯仏与仏の悟りであり、末法の凡夫には御本仏の所作・体験の上にしかそれを拝する手立てがないからです。そのために意の法華經を根本とするのです。

大聖人は『四信五品抄』に、

「妙法蓮華經の五字は經文に非ず、其の義に非ず、唯一部の意ならくのみ」（御書一一一四〇）

また『曾谷入道殿御返事』に、

「此の釈の心は妙法蓮華經と申すは文にあらず、義にあらず、一經の心なりと釈せられて候」（同 一一八八〇）

と仰せです。

すなわち、文義よりも意の法華經を根本とする理由は、文義意の法華經の中では意の法華經たる妙法蓮華經の五字こそが、一代仏教の功德が具わる仏の心（意）そのものだからです。

意の法華經を離れては法華經（仏）の心を求めることはできず、末法の衆生の成仏は不可能なのです。

逆に大聖人の意の法華經より立ち返って、釈尊、天台の文・義の法華經を拝するとき、法華經の真意が明らかになるのです。

種熟脱の法華經

種熟脱とは、仏が衆生を成仏へと導く経過を、稻などの穀物が生育していく過程に譬えたものです。

大聖人は『曾谷殿御返事』に、

「法華經は種^{たね}の如く、仏はうへての如く、衆生は田の如くなり」（同 一〇四〇^{ぎん}）と説かれています。つまり、仏が植え手となって成仏の種子を衆生の心田^{しんでん}に植えることを下種^{げしゅ}と言います。

さらに熟とは、下種された成仏の種子^{めぼ}が芽生え生育するのを助けて、それを次第に熟させていくことです。

最後の脱とは、種子が成長して熟し切ったところで、穀物の実りを収穫させること、すなわち得脱^{とくだつ}（悟りを得ること）させることです。

そもそも仏法では、因果を踏まえた種熟脱^{さんやく}の三益^{さんやく}があって初めて真実の利益があるのです。法華經は、この種熟脱の法門を、一切經の中で初めて明確に説いたのです。

ところが法華經以外の諸經には、どの仏によって成仏の種子が植えられ、その種子がどのように調熟^{じょうじゅく}され、脱せられるかという、仏の化導の過程が明かされていないのです。

諸經の教えがいかに甚深であると称しても、この種熟脱が説かれていなければ、衆生にとっては無益、無縁の教えであると断ずることができます。

大聖人は『秋元御書』に、

「種・熟・脱の法門、法華經の肝心なり。三世十方の仏は必ず妙法蓮華經の五字を種として仏に成り給へり」（同 一四四七^{ぎん}）

と説かれ、あらゆる仏は、妙法蓮華經の五字を種子として仏になることができたと言います。衆生はもとより、諸仏も下種の妙法蓮華經を成仏の種子としているのです。

広略要の法華經

広略要については、法体^{ほつたい}と修行の面、あるいは法華經の付嘱^{ふぞく}の面において御書に種々の御教示があります。

法華經について言えば、広は一部八巻の法華經、略は『方便品』・『寿量品』の両品、要は『寿量品』の文底に秘沈された妙法蓮華經の五字のことです。

大聖人は『法華取要抄』に、

「日蓮は広略を捨て、肝要を好む、所謂上行菩薩所傳^{しよでん}の妙法蓮華經の五字なり」（同 七三六^{ぎん}）

と説かれるように、大聖人は要の法華經を所持して末法に御出現なされたのです。

釈尊在世・正法時代の衆生は、広く法華經を受持・読・誦・解説・書写^{しよしゃ}するという、五種の妙行^{じよぼう}を行じました。

また像法時代の天台大師は略して『方便品』・『寿量品』を重んじて、自らは毎日、法華經の題目も唱えましたが、それを人々のためには説きませんでした。それは第一に、釈尊からの付嘱がなかったからです。

釈尊は、法華經の会座^{えざ}に居並ぶ弟子たちの誰にも許さなかった末法の弘教と肝要の法門の建立を、地涌の上首・上行菩薩に託されたのです。

釈尊の滅後二千年を経過すると、釈尊有縁の衆生は次第に少なくなり、やがて成仏のための種子が全くない荒凡夫のみの末法の時代となります。

この末法の時代に、衆生を救済することができるのは、本法を所持された上行菩薩の

再誕・末法の御本仏日蓮大聖人以外にはおられません。

末法の衆生は、大聖人の御化導に随^{したが}って、広略の法華經を捨てて、正しく肝要の法華經を受持することにより成仏できるのです。



以上の三種九部の法華經は、それぞれの異なった立場から、御本仏大聖人の末法出現を明かし、さらには三大秘法の建立を指し示しています。

すなわち末法流布の法華經は、大聖人の所持された意・種・要の妙法蓮華經の五字であり、成仏のための修行とその功德の一切は、三大秘法総在の本門戒壇の大御本尊に納まるのです。

私たち末法の衆生は、この大御本尊を受持することにより、必ず即身成仏できるのです。